

ほっとらいん
ふるむ
ほんごう

未来を拓く風は現場から吹いてくる 第4回日本在宅看護学会学術集会開催

2014年11月15日(土)、東京都品川区の東邦大学看護学部にて、第4回日本在宅看護学会学術集会が開催された。

現役の訪問看護ステーション管理者である阿部智子氏(訪問看護ステーションけせら)と高砂裕子氏(南区医師会訪問看護ステーション)を学術集会大会長に迎えた今回のテーマは、「未来を拓く在宅看護——もうまったなし、覚悟するなら今」。

後期高齢者数がピークに達する2025年へ残すところ10年あまりとなるなか、訪問看護師には地域包括ケアシステムの中核となる役割が期待されている。1992年の「老人訪問看護ステーション」制度発足以来取り組んできた実践・教育・研究者たちが一堂に会し、これまでの実践を糧に未来をみずから切り拓いていく覚悟を確認し合う場となった。

過去最高の参加者数

日本在宅看護学会は、川村佐和子氏(聖隷クリストファー大学教授)を理事長として、2011年に発足。時代や利用者の変化に応じて柔軟かつ多様に展開されてきた「在宅看護」を体系化し、学問としての「在宅看護学」を確立すること

をめざして設立された。第1回学術集会を同氏が務めたあと、第2回を棚橋さつき氏(高崎健康福祉大学教授)、第3回を尾崎章子氏(東邦大学教授)が歴任し、開催ごとに100人近く参加者を増やしながら発展。第4回となる今

学術集会の参加者数は、過去最高の473人だった。

地域包括ケア時代の在宅看護とは

「風を捉えて、地域に羽ばたく在宅看護」と題された大会長講演では、まず阿部氏が登壇し、介護保険等の制度に背中を押され、増大する需要に応えるかたちで発展してきた在宅看護の歴史を、自身のステーションの展開と併せてふりかえった。新設ステーション



学術集会長の阿部氏(左)、高砂氏(右)

が急増するなか質の向上とそのための教育が急務であるとし、「質の向上こそがイノベーションを生む。これからは時代の風に乗るだけでなく、自分たちで風を呼び寄せる強さが必要」と締めくくった。次いでマイクをとった高砂氏は、「利用者主体で生活に即した看護ができる」と在宅看護の魅力を改めて述べたうえで、多職種との連携や地域づくりに触れ、2013年に全国訪問看護事業協会が受託した「訪問看護ステーション」の多機能化モデル事業に参加した経験から、これからの在宅看護に求められるのは「在宅療養総合支援ステーション(仮称)」というべき地域拠点機能である

と述べた。

続けて聖路加国際大学教授の吉田千文氏による教育講演が「地域包括ケアにおける在宅看護の役割——アクションリサーチから」と題して行なわれ、会場に

大いに示唆を与えた。

午後は、同学会主催の「研究倫理セミナー」、日本褥瘡学会在宅医療委員会との合同企画「訪問看護における褥瘡に関する危険因子の評価」で幕を開けた。さらに「在宅看護実習」と「現場実践」をテーマにしたシンポジウムもそれぞれ行なわれ、活発な議論が交わられた。また「特別セミナー」として、2014年6月に位置づけられた「特定行為」とその研修制度に関する情報提供が行なわれた。

学会賞を3氏が受賞

学会賞には、ベストオーラル賞を岡部明子氏(東海大学)ほかによる「病棟・外来・訪問看護師が認識する移行期支援における看看連携の現状と課題——連携のスムーズさの認識とその理由(自由記載)の分析から」、ベストポスター賞を野村悦子氏(日本バプテスト看護専門学校)の「多施設で行なった在宅看護論実習」、ベストプラクティス賞を仲野真由美氏ほか(訪問看護ステーションかがやき)の「ラーメンが食べたいと希望した療養者への支援——訪問看護師と在宅管理栄養士との協働による『食べる楽しみ』への支援」がそれぞれ受賞した。

次回第5回は、山田雅子氏(聖路加国際大学教授)を学術集会会長とし、2015年11月21日(土)に開催される。